

## 弘前大学学部生の喫煙状況と 喫煙に対する意識調査

漆坂真弓<sup>1</sup>、高梨信吾<sup>2</sup>、阿部 緑<sup>2</sup>、工藤誓子<sup>2</sup>、三国谷恵<sup>3</sup>、中村邦彦<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 弘前大学大学院保健学研究科、<sup>2</sup> 弘前大学保健管理センター、<sup>3</sup> 弘前大学大学院医学研究科

**【目的】** 弘前大学学部生の喫煙状況及び喫煙に対する意識について明らかにし、喫煙防止教育、禁煙教育について示唆を得ること。

**【方法】** 2009年に学部生6,059人を対象に、属性、喫煙の有無、家族と親しい友人の喫煙状況、喫煙に対する意識について無記名自記式質問紙調査を行った。

**【結果】** 喫煙者の割合は全体で9.2%、男性13.5%、女性4.7%であった。初めてタバコを吸った年齢は20歳が最も多かった。1年生よりも3～6年生に喫煙者、喫煙経験者の割合が多かった。学生の喫煙に親、兄弟姉妹、親しい友人の喫煙状況との関連が示唆された。喫煙者及び喫煙経験者は喫煙習慣を容認するものが多かった。

**【考察】** 20歳を境に喫煙を始めていることから、現在大学で行っている喫煙防止教育の見直しと全学年を通じた継続的な喫煙防止教育が必要である。

**【結論】** 喫煙防止教育及び禁煙教育には、タバコを吸わないという動機付けが重要である。さらに学生の喫煙には学生を取り巻く多くの人々の喫煙状況が関与しているため、喫煙を容認しない地域社会づくりが重要である。

**キーワード:** 大学生、喫煙状況、喫煙防止教育、禁煙教育、動機付け

### 1. はじめに

2000年に始まった第3次国民健康づくり運動も事後評価をする時期を迎えた。課題の一つであるタバコ対策については知識の普及等を含めた4つの目標が掲げられ、自治体毎に取り組みがされている<sup>1)</sup>。青森県は、成人男性の喫煙率25%以下、成人女性5%以下、未成年者0%を目標に禁煙・防煙・分煙

の普及啓発を行っている<sup>2)</sup>。2005年度の間評価では男性喫煙率39.4%、女性喫煙率8.2%であったが、喫煙率が高い年代から男性30歳代58.8%、20歳代と50歳代が50.0%、女性20歳代28.6%、30歳代17.1%と、20歳代、30歳代の喫煙率が他の年齢階級に比べ高かった<sup>2)</sup>。これら年代の発達課題には結婚、出産、育児があり、親となる年代の喫煙は親自身の健康問題の他に、子どもの健康や喫煙行動への影響が懸念される。そのため20歳代、30歳代の喫煙状況、喫煙行動の背景や喫煙に対する意識について把握し、喫煙防止及び禁煙支援対策の課題を明らかにすることが求められる。

青森県にある弘前大学は学部生約6,000人が在学し、その多くが20歳代である。現在大学において

### 連絡先

〒036-8564  
青森県弘前市本町66-1  
弘前大学大学院保健学研究科 漆坂真弓  
TEL: 0172-39-5944 FAX: 0172-39-5912  
e-mail: urushima@cc.hirosaki-u.ac.jp  
受付日2010年5月12日 採用日2010年8月3日

も受動喫煙防止活動や喫煙防止教育等学生の喫煙問題に取り組み、2007年10月からは敷地内全面禁煙の体制となっているが、学校敷地付近で喫煙する学生はいまだ見受けられる。そこで本研究では、喫煙防止教育、禁煙教育に関する示唆を得ることを目的に、学部学生を対象に喫煙状況と喫煙に対する意識について調査を行った。

## 2. 方法

### 1) 対象及び方法

弘前大学学部生6,059人。2009年4～7月に無記名自記式質問紙調査を行った。学生健康診断時に質問紙を配布し、記入後回収ボックスに投函してもらった。

### 2) 調査内容

質問紙は先行研究を参考に独自に作成した。内容は①属性；性別、年齢、学年、②対象者の喫煙状況；喫煙の有無、初めて喫煙した年齢、③家族(父母・兄弟姉妹)と親しい友人の喫煙状況、④タバコの害・タバコと健康についての受講の有無、⑤喫煙に対する意識；タバコを吸っている人を見ると不快に感じる、タバコを吸う生活習慣も尊重されて良いと思う、タバコを吸うのは良いことがあるから、テレビ等で見る喫煙シーンをカッコいいと思う、(家族、友人に喫煙者がいる人に対し)家族・友人にタバコを吸ってほしくない、である。

喫煙の有無は「吸ったことがない」「数回試しに吸ったことがある」「時々吸うが毎日吸っていない」「毎日吸っている」の選択肢で、「吸ったことがない」ものを非喫煙者、「数回試しに吸ったことがある」ものを喫煙経験者、「時々吸うが毎日吸っていない」「毎日吸っている」ものを喫煙者とした。家族・親しい友人の喫煙状況は「現在喫煙している」「以前喫煙していた」に該当するものについて回答してもらった。「現在喫煙している」「以前喫煙していた」に該当したものを喫煙群、回答がないものを非喫煙群とした。喫煙に対する意識は、「思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらとも言えない」「あまり思わない」「思わない」から選択し、「思う」「どちらかといえばそう思う」は「思う」に、「あまり思わない」「思わない」は「思わない」にし、「どちらとも言えない」はそのままとした。

### 3) 分析方法

統計解析にはSPSS 11.5J for windowsを用いた。対象者の属性、家族や親しい友人の喫煙状況、タバコの害・タバコと健康についての受講の有無、喫煙に対する意識について、喫煙者、喫煙経験者、非喫煙者で $\chi^2$ 検定及び残差分析にて比較を行い、有意水準は5%未満とした。

### 4) 倫理的配慮

質問紙は無記名で、質問紙への回答は自由意志によるものであり、結果は統計処理を行い個人が特定されることはないことを説明した。研究参加は、回収ボックスへの投函をもって同意が得られたものとした。

## 3. 結果

学部生6,059人のうち、対象者の喫煙状況の記載がない等の無効回答を除き得られた有効回答数は4,225人(69.7%)であった。対象者4,225人のうち男性2,130人(50.4%)、女性2,079人(49.2%)、平均年齢は $20.2 \pm 2.2$ 歳であった。2年生の平均年齢 $19.5 \pm 1.2$ 歳、3年生 $20.7 \pm 1.6$ 歳と、2、3年生を境に未成年と成人に分かれていた。未成年者は1,717人(40.6%)、成人は2,494人(59.0%)であった。

### 1) 属性と喫煙状況との比較

喫煙者は388人(9.2%)、平均年齢 $21.3 \pm 2.5$ 歳、喫煙経験者367人(8.7%)、平均年齢 $21.4 \pm 3.1$ 歳であった。学年別、未成年・成人別、男女別の喫煙状況は表1に示す。喫煙者と喫煙経験者が初めてタバコを吸った年齢で最も多い回答はともに20歳で、喫煙者135人(34.8%)、喫煙経験者124人(33.8%)であった(図1)。無記入回答を除いた性別、学年別、未成年・成人別で有意差がみられた(表2)。残差分析による頻度の差では、性別では男性の喫煙者と喫煙経験者が女性よりも多かった。学年別では1年生よりも3～6年生に喫煙者及び喫煙経験者が多く、成人・未成年別では成人の喫煙者と喫煙経験者が未成年よりも多かった。

### 2) 家族、親しい友人の喫煙状況との比較

家族の中の喫煙群で最も多いのは父親で2,914人(69.0%)であった。家族の喫煙状況別の比較で有意差がみられた(表3)。残差分析の頻度の差をみる

表1 学部生の喫煙状況

表1は、学生の喫煙状況(喫煙者、喫煙経験者、非喫煙者)別に、性別、学年、未成年・成人の属性ごとの人数と割合を示したものである。学年と未成年・成人においては、それぞれ男女別の人数と割合も示した。本学の喫煙者の割合は全体で9.2%、喫煙経験者は8.7%であった。男性の喫煙率は13.5%、女性4.7%、未成年の喫煙率2.4%、成人13.9%であった。

	喫煙状況					
	喫煙者		喫煙経験者		非喫煙者	
	人	%	人	%	人	%
<b>【性別】</b>						
<b>全体 n=4225</b>	<b>388 (9.2)</b>		<b>367 (8.7)</b>		<b>3470 (82.1)</b>	
男性 n=2130	288 (13.5)		244 (11.5)		1598 (75.0)	
女性 n=2079	98 (4.7)		121 (5.8)		1860 (89.5)	
無記入 n=16	2 (12.5)		2 (12.5)		12 (75.0)	
<b>【学年別】</b>						
<b>1年 n=1171</b>	<b>13 (1.1)</b>		<b>45 (3.8)</b>		<b>1113 (95.0)</b>	
男性 n=595	11 (1.8)		33 (5.5)		551 (92.6)	
女性 n=571	2 (0.4)		12 (2.1)		557 (97.5)	
無記入 n=5	0 (0.0)		0 (0.0)		5 (100)	
<b>2年 n=945</b>	<b>76 (8.0)</b>		<b>64 (6.8)</b>		<b>805 (85.2)</b>	
男性 n=463	62 (13.4)		44 (9.5)		357 (77.1)	
女性 n=480	13 (2.7)		20 (4.2)		447 (93.1)	
無記入 n=2	1 (50.0)		0 (0.0)		1 (50.0)	
<b>3年 n=900</b>	<b>116 (12.9)</b>		<b>94 (10.4)</b>		<b>690 (76.7)</b>	
男性 n=442	79 (17.9)		59 (13.3)		304 (68.8)	
女性 n=456	36 (7.9)		35 (7.7)		385 (84.4)	
無記入 n=2	1 (50.0)		0 (0.0)		1 (50.0)	
<b>4年 n=969</b>	<b>146 (15.1)</b>		<b>122 (12.6)</b>		<b>701 (72.3)</b>	
男性 n=475	105 (22.1)		76 (16.0)		294 (61.9)	
女性 n=488	41 (8.4)		44 (9.0)		403 (82.6)	
無記入 n=6	0 (0.0)		2 (33.3)		4 (66.7)	
<b>5年 n=60</b>	<b>11 (18.3)</b>		<b>14 (23.3)</b>		<b>35 (58.3)</b>	
男性 n=43	10 (23.3)		11 (25.6)		22 (51.2)	
女性 n=17	1 (5.9)		3 (17.6)		13 (76.5)	
<b>6年 n=77</b>	<b>12 (15.6)</b>		<b>18 (23.4)</b>		<b>47 (61.0)</b>	
男性 n=58	11 (19.0)		15 (25.9)		32 (55.2)	
女性 n=19	1 (5.3)		3 (15.8)		15 (78.9)	
<b>無記入 n=103</b>	<b>14 (13.6)</b>		<b>10 (9.7)</b>		<b>79 (76.7)</b>	
男性 n=54	10 (18.5)		6 (11.1)		38 (70.4)	
女性 n=48	4 (8.3)		4 (8.3)		40 (83.3)	
無記入 n=1	0 (0.0)		0 (0.0)		1 (100)	
<b>【未成年・成人別】</b>						
<b>未成年 n=1717</b>	<b>41 (2.4)</b>		<b>73 (4.3)</b>		<b>1603 (93.4)</b>	
男性 n=840	35 (4.2)		52 (6.2)		753 (89.6)	
女性 n=871	6 (0.7)		21 (2.4)		844 (96.9)	
無記入 n=6	0 (0.0)		0 (0.0)		6 (100)	
<b>成人 n=2494</b>	<b>347 (13.9)</b>		<b>293 (11.7)</b>		<b>1854 (74.3)</b>	
男性 n=840	253 (19.7)		192 (14.9)		841 (65.4)	
女性 n=871	92 (7.7)		99 (8.3)		1007 (84.1)	
無記入 n=6	2 (20.0)		2 (20.0)		6 (60.0)	
<b>無記入 n=14</b>	<b>0 (0.0)</b>		<b>1 (7.1)</b>		<b>13 (92.9)</b>	
男性 n=840	0 (0.0)		0 (0.0)		4 (100)	
女性 n=871	0 (0.0)		1 (10.0)		9 (90.0)	

図1 初めてタバコを吸った年齢

図1は、喫煙者と喫煙経験者が初めてタバコを吸った年齢について集計し、人数とその割合を示したものである。年齢は、「7歳以下」は小学校入学前の年齢、「7-12歳」は小学生のころ、「13-15歳」は中学生のころ、「16-18歳」は高校生をのころ、「19歳」は大学生で未成年、「20歳」は大学生で成人し喫煙が認められる年齢、「21歳以上」は大学生で成人、という意図で区分した。図1から、喫煙者、喫煙経験者共に20歳で初めてタバコを吸ったものが多いことが分かった。

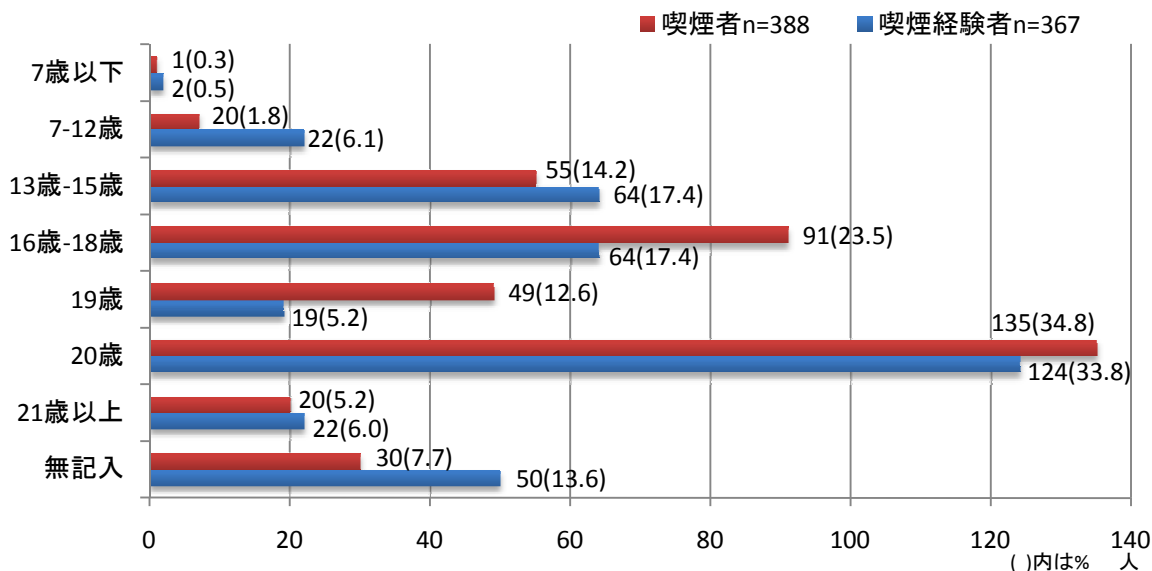


表2 属性と喫煙状況

表2は、対象者の属性(性別、学年別、未成年・成人別)を対象者の喫煙状況別に集計した人数と割合を示し、 $\chi^2$ 検定と残差分析の結果を示した。分析に際し、無記入の回答を除いて行った。 $\chi^2$ 検定の結果p値を記載し、残差分析の結果は調整済み残差が2以上の項目を黄色で、-2以上の項目を緑色で示した。表2から、男性の喫煙者と喫煙経験者が女性よりも多いことが分かった。1年生の喫煙者よりも3~6年生の喫煙者が多いこと、1、2年生の喫煙経験者よりも3~6年生の喫煙経験者が多いことが分かった。さらに、未成年者の喫煙者よりも、成人の喫煙者と喫煙経験者が多いことが分かった。

		学部生の喫煙状況			p値 ( $\chi^2$ 検定)		
		喫煙者n=388	喫煙経験者n=367	非喫煙者n=3470			
		人	%	人	%	人	%
性別 n=4209	男性 n=2130	288	(13.5)	244	(11.5)	1598	(75.0)
	女性 n=2079	98	(4.7)	121	(5.8)	1860	(89.5)
学年別 n=4122	1年生 n=1171	13	(1.1)	45	(3.8)	1113	(95.0)
	2年生 n=945	76	(8.0)	64	(6.8)	805	(85.2)
	3年生 n=900	116	(12.9)	94	(10.4)	690	(76.7)
	4年生 n=969	146	(15.1)	122	(12.6)	701	(72.3)
	5年生 n=60	11	(18.3)	14	(23.3)	35	(58.3)
	6年生 n=77	12	(15.6)	18	(23.4)	47	(61.0)
未成年・成人別 n=4211	未成年 n=1717	41	(2.4)	73	(4.3)	1603	(93.4)
	成人 n=2494	347	(13.9)	293	(11.7)	1854	(74.3)

※無記入回答を除き統計分析を行った

※( )内は無記入回答を除いた数に対する割合

黄色 : 残差分析による調整済み残差2以上で、他よりも頻度が有意に多い

緑色 : 残差分析による調整済み残差2以上で、他よりも頻度が有意に少ない



と、非喫煙者と比べて喫煙者には喫煙群の父親、母親、兄弟姉妹が、喫煙経験者には喫煙群の兄弟姉妹が多かった。親しい友人のうち1,056人(25.0%)が喫煙群であった。喫煙者と喫煙経験者には喫煙群の友人が非喫煙者よりも多かった(表3)。

### 3) 喫煙に対する意識との比較

喫煙に対する意識について無記入回答を除き比較した。各質問項目で有意差がみられた(表4)。残差分析による頻度の差から、「タバコの害・タバコと健康についての受講」について、非喫煙者は受講したと回答したものが多く、喫煙者及び喫煙経験者は受講したと回答したものが少なかった。「タバコを吸っている人を見ても不快に思わない」「タバコを吸う生活習慣も尊重されても良いと思う」のは非喫煙者よりも喫煙者、喫煙経験者に多かった。非喫煙者と比べ「タバコを吸うのはタバコを吸うと良いことがあるからだと思う」のは喫煙者に、「テレビ等で喫煙シーンを見るとカッコいいと思う」のは喫煙経験者に多かった。「家族や友人にタバコを吸ってほしくないと思う」のは喫煙者よりも非喫煙者に多かった。

## 4. 考察

### 1) 弘前大学学部生の喫煙状況

男性の喫煙率13.5%、女性4.7%と青森県の同年

齢階級の喫煙率よりも低い結果であった。厚生労働省の最新たばこ情報によれば、成人及び未成年者の喫煙率が減少傾向にある<sup>3)</sup>。この喫煙率に影響を及ぼしている要因の一つに、2000年に開始された健康日本21の取り組みが挙げられるだろう。本調査から、非喫煙者は喫煙習慣や喫煙を否定的に捉え、家族や友人にタバコを吸ってほしくないと考えられる傾向が示された。非喫煙者の多くが、タバコの害やタバコと健康について受講していたことから、健康日本21による喫煙防止教育が喫煙を否定的に捉えるきっかけとなり、その結果、喫煙率の低下につながったと考えられる。3~6年生に喫煙経験者が多かったことは、何らかの理由で禁煙したため大学全体での喫煙率が低くなったことも考えられる。3~6年生が1~4年生だった2007年当時、敷地内全面禁煙の体制となった。これを契機に大学では、学生だけではなく教職員にも禁煙教育を行う等喫煙防止・禁煙教育に取り組んできた。この喫煙を容認しない大学の姿勢や取り組みは、多少なりともその当時喫煙者であった学生に影響を与え、禁煙への一因になったのではないかと考える。その他本学学生の喫煙率の低さの他の要因として、回収率が約70%だったことを考えると喫煙学生の回収率が低かった可能性もあり得る。しかしながら喫煙率の低さについては何らかの要因が存在すると思われ、喫煙率に影響を及ぼす要因、例えば学生の生活環境や学習環境、心身

表3 家族、親しい友人の喫煙状況

表3は、家族と親しい友人の喫煙状況(以前または現在喫煙者の喫煙群、喫煙をしたことがない非喫煙群)を、対象者の喫煙状況別に集計した人数と割合を示した。 $\chi^2$ 検定と残差分析の結果も示し、 $\chi^2$ 検定の結果p値を記載し、残差分析の結果は調整済み残差が2以上の項目を黄色で、-2以上の項目を緑色で示した。喫煙者には家族、親しい友人の喫煙群が、非喫煙者の家族、親しい友人の喫煙群よりも多いことが分かった。

		学部生の喫煙状況			p値 ( $\chi^2$ 検定)	
		喫煙者n=388	喫煙経験者n=367	非喫煙者n=3470		
		人	%	人	%	
父親 n=4225	喫煙群 n=2914	299	(77.1)	254	(69.2)	p<0.05
	非喫煙群 n=1311	89	(22.9)	113	(30.8)	
母親 n=4225	喫煙群 n=695	101	(26.0)	64	(17.4)	p<0.001
	非喫煙群 n=3530	287	(74.0)	303	(82.6)	
兄弟姉妹 n=4225	喫煙群 n=762	118	(30.4)	93	(25.3)	p<0.001
	非喫煙群 n=3463	270	(69.6)	274	(74.7)	
親しい友人 n=4225	喫煙群 n=1056	223	(57.5)	153	(41.7)	p<0.001
	非喫煙群 n=3169	165	(42.5)	214	(58.3)	

※( )内は学部生の喫煙状況別を分母とした割合

黄色 : 残差分析による調整済み残差2以上で、他より頻度が有意に多い

緑色 : 残差分析による調整済み残差-2以上で、他より頻度が有意に少ない

の健康状態や意識等、学部生の背景や特徴を踏まえて今後調査を行う必要がある。

学年別の喫煙率は1年生と3年生以上で、さらに未成年と成人別で有意な差を認めた。初めて喫煙した年齢で最も多い回答が喫煙者、喫煙経験者ともに20歳であったことから、本学では20歳を境に喫煙を始めている学生が多いことが推察できる。大学入学後に喫煙率が高くなることや20歳での喫煙開始が多いことが先行研究でも指摘されている<sup>4~7, 13)</sup>。20

歳を境に喫煙率が高くなる理由には、喫煙に関する法的規制が20歳から外れ喫煙が社会的には容認される背景、「タバコは二十歳を過ぎてから吸いましょう」という宣伝、さらに20歳を過ぎることで周囲からの喫煙行動への抑止が減少する等、喫煙行動への障壁が低くなることが考えられる。しかしながら、なぜ喫煙を始めたのかについては今回調査を行っていないため、学生が喫煙を始める動機や契機、要因等について明らかにする必要がある。

#### 表4 喫煙に対する意識

表4は、喫煙に対する意識について質問項目ごとに、喫煙状況別に人数と割合を示し、 $\chi^2$ 検定と残差分析の結果も示した。 $\chi^2$ 検定の結果p値を記載し、残差分析の結果は調整済み残差が2以上の項目を黄色で、-2以上の項目を緑色で示した。表4から、喫煙者及び喫煙経験者は喫煙や喫煙習慣を容認する傾向にあることが、非喫煙者は喫煙や喫煙習慣を否定的に捉えている傾向にあること、さらに非喫煙者は家族や友人にタバコを吸って欲しくないと思っている傾向にあることが分かった。

		学部生の喫煙状況			p値 ( $\chi^2$ 検定)
		喫煙者 人 %	喫煙経験者 人 %	非喫煙者 人 %	
タバコの害・タバコと健康についての受講の有無 n=4186	受講した n=3494	298 (77.4)	284 (79.1)	2912 (84.6)	p<0.001
	受講していない n=278	42 (10.9)	33 (9.1)	203 (5.9)	
	覚えていない n=414	45 (11.7)	42 (11.7)	327 (9.5)	
総数		385 (100)	359 (100)	3442 (100)	
タバコを吸っている人を見ると不快に感じる n=4223	思う n=2683	42 (10.8)	176 (48.0)	2465 (71.1)	p<0.001
	思わない n=883	265 (68.3)	108 (29.4)	510 (14.7)	
	どちらとも言えない n=657	81 (20.9)	83 (22.6)	493 (14.2)	
総数		388 (100)	367 (100)	3468 (100)	
タバコを吸う生活習慣も尊重されて良い n=4221	思う n=811	174 (44.8)	92 (25.1)	545 (15.7)	p<0.001
	思わない n=2164	79 (20.4)	167 (45.6)	1918 (55.3)	
	どちらとも言えない n=1246	135 (34.8)	107 (29.2)	1004 (29.0)	
総数		388 (100)	366 (100)	3467 (100)	
タバコを吸うのは、タバコを吸うと良いことがあるからだ n=4215	思う n=630	120 (30.9)	58 (15.8)	452 (13.1)	p<0.001
	思わない n=2763	164 (42.3)	213 (58.2)	2386 (68.9)	
	どちらとも言えない n=822	104 (26.8)	95 (26.0)	623 (18.0)	
総数		388 (100)	366 (100)	3461 (100)	
テレビや雑誌で喫煙シーンをみると、カッコいいと思う n=4201	思う n=656	70 (18.0)	85 (23.5)	501 (14.5)	p<0.001
	思わない n=2442	166 (42.8)	164 (45.4)	2112 (61.2)	
	どちらとも言えない n=1103	152 (39.2)	112 (31.0)	839 (24.3)	
総数		388 (100)	361 (100)	3452 (100)	
家族にはタバコを吸ってほしくない n=2736	思う n=2193	133 (40.2)	201 (78.5)	1859 (86.5)	p<0.001
	思わない n=235	108 (32.6)	20 (7.8)	107 (5.0)	
	どちらとも言えない n=308	90 (27.2)	35 (13.7)	183 (8.5)	
総数		331 (100)	256 (100)	2149 (100)	
友人にはタバコを吸ってほしくない n=915	思う n=555	46 (21.8)	81 (60.4)	428 (75.1)	p<0.001
	思わない n=191	104 (49.3)	28 (20.9)	59 (10.4)	
	どちらとも言えない n=169	61 (28.9)	25 (18.7)	83 (14.6)	
総数		211 (100)	134 (100)	570 (100)	

※無記入回答を除き統計分析を行った

※( )内は無記入回答を除いた喫煙者、喫煙経験者、非喫煙者を分母とした割合

黄色 : 残差分析による調整済み残差2以上で、他より頻度が有意に多い

緑色 : 残差分析による調整済み残差-2以上で、他より頻度が有意に少ない

親の喫煙行動が子どもの喫煙行動に影響すること<sup>8-11)</sup>、特に母親が非喫煙者で喫煙に反対の姿勢を示している場合、その子どもが青年期に喫煙する割合が少ないことが報告されている<sup>12)</sup>。本学学生においても、学生の喫煙状況と父親、母親、兄弟姉妹の喫煙状況に関連があることが分かった。親が喫煙者である場合、子どもに喫煙防止教育を行っても説得力に欠け、むしろ身近にタバコがあり手に入りやすいこともあって容易に喫煙行動を起こしやすいといえよう。兄弟姉妹に喫煙群が多いのも、結局は親の喫煙が関連した結果といえる。一方で、中高生の喫煙、大学生の喫煙行動には友人の喫煙が関連していることも指摘されている<sup>9,13)</sup>。本学においても、学生の喫煙状況と友人の喫煙状況に関連があることが示された。学生の中には親元を離れて生活しているものも少なくない。学生によってはアルバイトやボランティア活動等、地域社会で多くの人に接する機会を持つものもある。学生が多くの時間を共有する友人や地域社会の人々に影響を受けていることが推測される。

## 2) 喫煙防止教育、禁煙教育への示唆

本学学部生の喫煙状況及び喫煙に対する意識から、喫煙防止教育、禁煙教育に関する示唆を得た。一つには、喫煙防止と禁煙にむけた動機付けとしての教育の必要性である。多くの非喫煙者がタバコの影響とタバコと健康について受講したと回答し、さらに喫煙を否定的に捉え家族や友人にはタバコを吸ってほしくないと答えていることは、喫煙防止教育が喫煙への抑止力の一つになっていると考えられる。一方、先行研究では喫煙防止教育を行っても学生の喫煙に対する意識は時間の経過とともに低下するため、喫煙防止教育で学生の意識を改善する難しさを言及している<sup>14)</sup>。加えて喫煙経験者は非喫煙者と比較し喫煙を容認、正当化する傾向がみられることが指摘されている<sup>15,16)</sup>。今回の調査の結果でも、喫煙者や喫煙経験者は、喫煙習慣を容認する傾向にあり、喫煙者はタバコを吸うのは良いことがあるからと思うものが多く、喫煙経験者は喫煙シーンをみるとカッコいいと思うものが多いことが分かった。このことからタバコは決して吸わないと動機付けるような教育が必要だといえよう。本学での喫煙防止教育は入学時及び1、2年次の基礎教育科目で、学部によっては専門科目の中で行われている。にもか

かわらず20歳を境に喫煙率が高くなっていることを鑑みると、現在行われている喫煙防止教育について見直す必要があるといえる。知識の側面だけではなく喫煙をしない動機付けとしての教育効果を検証すること、さらに1年生は勿論のこと、2、3年生と全学年を通じて喫煙防止教育及び禁煙教育を継続的に行っていくことが不可欠である。加えて、親や地域社会を巻き込んだ喫煙防止、禁煙に関する教育の必要性である。学生の喫煙に親や友人の喫煙状況が関係していることから、喫煙防止には学生を取り巻く多くの人々の喫煙に対する意識が重要となる。親や地域社会を含めて喫煙防止に関する啓蒙活動を行い、喫煙を容認しない地域社会づくりが求められる。

## 3) 研究の限界

本研究は自記式質問紙調査である。質問紙作成に当たっては回答のしやすさ、文章の分かりやすさ等を十分に考慮したが、質問意図の読み違いや記載の誤り等、回答の信頼性には限界がある。質問紙調査の回収率は一般的に60%以上あることが望まれるが、本調査は69.7%であった。結果を分析するには決して低い値ではないと考えるが、研究結果の信頼性や妥当性を保つためには、質問紙の精度及び回収率を高める工夫が必要である。学生の喫煙状況について、呼気中の一酸化炭素濃度測定等を取り入れてはいたないため、実際の喫煙状況を表しているか客観的評価をすることはできない。今後質問紙調査の結果を補完する客観的指標となるデータ収集を検討することが必要である。

## 5. 結 論

弘前大学学部生は20歳を境に喫煙を始めている学生が多く、学生の喫煙には家族や親しい友人の喫煙が関係していることが明らかになった。大学での喫煙防止教育、禁煙教育を全学年に対し継続的に行い、タバコを吸わないという動機付けを行うことが必要である。さらに、学生を取り巻く地域社会に対しても喫煙防止を啓蒙し喫煙を認めない社会づくりが重要である。

## 参考文献

- 1) 財団法人厚生統計協会: 第3編保健と医療の動向 第1章生活習慣病と健康増進対策. 国民衛生の動向・厚生指標増刊 2009; 56 (9) ; 81-96.



- 2) 青森県健康福祉部保健衛生課: 健康増進計画 21世紀における県民健康づくり運動「健康あおり21」改訂版～中間評価と今後の取り組み～ 2007; 1-77.
- 3) 厚生労働省の最新たばこ情報ホームページ; <http://www.health-net.or.jp/tobacco/product/>
- 4) 神田清子, 石田純子, 反町真由, ほか: 保健学科学学生の喫煙状況と喫煙知識に関する調査. 群馬保健学紀要 2004; 25; 85-91.
- 5) 八杉 倫, 西山 緑, 大石賢二: 医療系大学における習慣的喫煙者と非喫煙者のライフスタイルとタバコに対する意識調査の検討. Dokkyo Journal of Medical Science 2007; 34 (3) ; 221-229.
- 6) 叶多博美: 大学生の喫煙に関する知識の実態. 茨木キリスト教大学紀要 2008; 42; 325-336.
- 7) 小松正子, 松山恒博, 咲間 優: 仙台大学生の喫煙習慣について－喫煙開始状況と喫煙率減少策に関する検討－. 仙台大学紀要 1999; 31 (1) ; 15-22.
- 8) 齋藤久美子, 小倉能理子, 工藤千賀子, ほか: 青森県の看護学生の喫煙行動と喫煙に対する意識. 弘前大学保健学科紀要 2008; 7; 45-53.
- 9) 尾崎米厚: 青少年の喫煙行動、関連要因、および対策. J.Natl.Inst.Public Health 2005; 54 (4) ; 284-289.
- 10) 安藤美津子, 峠 哲男: 中学生の喫煙の現状と保護者の喫煙に対する意識の関与－喫煙に関する中学生と保護者の同時調査－. 香川大学看護学雑誌 2008; 12 (1) ; 7-17.
- 11) Wilkinson A.V, Shete S, Prokhorov A.V: The moderating role of parental smoking on their children's attitudes toward smoking among a predominantly minority sample: a cross-sectional analysis. Substance Abuse Treatment, Prevention, and Policy 2008; 3; 1-8.
- 12) Andersen M.R, Leroux B.G, Marek P.M, et al: Mothers' Attitudes and Concerns about Their Children Smoking: Do They Influence Kids?. Preventive Medicine 2002; 34; 198-206.
- 13) 栗岡成人, 稲垣孝司, 吉井千春, ほか: 加濃式社会的ニコチン依存度調査票による女子学生のタバコに対する意識調査 (2006年度). 日本禁煙学会雑誌 2007; 2 (5) ; 62-68.
- 14) 小林亜由美, 澤田只夫, 保坂さえ子, ほか: 医療系大学生に対する入学時防煙・禁煙教育の効果－講義前、直後、1年後の喫煙状況、知識、意識の比較－. 群馬パース大学紀要 2007; 4; 443-453.
- 15) 遠藤 明, 加濃正人, 吉井千春, ほか: 小学校高学年生の喫煙に対する認識と禁煙教育の効果. 日本禁煙学会雑誌 2007; 2 (1) ; 10-12.
- 16) 岸本桂子, 福島紀子: 薬学生を対象とした禁煙支援教育の効果. 日本禁煙学会雑誌 2009; 4 (1) ; 12-19.



## **A survey of smoking status and attitudes towards smoking in Hirosaki University undergraduate students**

Mayumi Urushizaka<sup>1</sup>, Shingo Takanashi<sup>2</sup>, Midori Abe<sup>2</sup>, Chikako Kudo<sup>2</sup>  
Megumi Mikuniya<sup>3</sup>, Kunihiro Nakamura<sup>3</sup>

### **Purpose**

This study aimed to clarify smoking status and attitudes towards smoking in Hirosaki University undergraduate students and provide suggestions for smoking prevention education and no-smoking advocacy education.

### **Methods**

In 2009, anonymous self-assessment surveys were administered to 6,059 undergraduate students. The survey included questions on personal attributes, smoking status of the students and their close friends and family members, and attitudes towards smoking.

### **Results**

The percentage of all respondents who smoked was 9.2%, and the percentage of smokers among men and women was 13.5% and 4.7%, respectively. Most of these individuals had their first cigarette at 20 years old. There was a larger proportion of smokers and former smokers among 3rd to 6th year students than 1st year students. A link was suggested between the smoking status of respondents and that of their parents, siblings and close friends. A greater number of smokers and former smokers tolerated smoking habits than non-smokers.

### **Discussion**

Many students were shown to begin smoking at 20 years of age. This implies that it is necessary to revise the current smoking prevention education system carried out at universities and expand the system so that such education is given to students throughout all years of university.

### **Conclusion**

It is important to motivate students not to smoke through smoking prevention education and no-smoking advocacy education. Furthermore, as the smoking status of the many individuals surrounding students contributes to the smoking status of those students themselves, it is important to ensure that communities as a whole do not tolerate smoking.

### **Key Words**

University student, smoking status, smoking prevention education, no-smoking advocacy education, motivation

<sup>1</sup> Hirosaki University Graduate School of Health Science, Aomori, Japan

<sup>2</sup> Hirosaki University Health Administration Center, Aomori, Japan

<sup>3</sup> Hirosaki University Graduate of Medicine, Aomori, Japan